九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『和独対訳辞林』注記部に関する検討 : 『和英語林集成』との異同状況から

坂本, 浩一
九州大学大学院（博士課程）

https://doi.org/10.15017/11938

出版情報：語文研究. 66/67, pp.1-11, 1989-06-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

『和独対訳辞林』注記部に関する検討

——『和英語林集成』との異同状況から——

坂　本　浩　一

一　はじめに

官版『語彙』の挫折など邦人の国語辞書編纂が苦難の道を歩んでいた時期，J. C. ヘボンが苦心を重ねて編集した『和英語林集成』は確かに明治初期の辞書史を飾る一大成果であった。その登載される言語情報が，編者自らが東京語圏に送る生活のなかから採集した所に基づく為に，とりわけ貴重なものと見なされるのである。その第Ⅱ版（1872）と第Ⅲ版（1886）との間に『和独対訳辞林』（1877）は成る訳であるが，これは従来ヘボン辞書の模書として顧みられる所の少ない資料であった。しかし，その内部を子細に窺うにつけ諸処に独自の改変部分を孕み持つ重要な言語資料であることが，これ迄に試みた見出し項目部・同義語表示部の調査から次第に明らかとなってきた（注１）。即ちR.レーマンの校定による『和独対訳辞林』こそは『和英語林集成』の格好の対照資料としての地位を得るべき資料なのである。ヘボン辞書の種々の注記は対訳辞書は勿論のこと，以降の国語辞書に於いても大いに参考となる優れた工夫であったと言えるが，同時代に於ける邦人側よりすると，必ずしも全部が全部納得のいく状況にはなかったようである。本稿に於いては特に口頭語・卑俗語或は方言地点名等に関する注記部分を取り上げ，『和独対訳辞林』『和英語林集成』両対訳辞書に反映した当代の言語意識を交えて検討したい。

二　注記対応の概要

一口に注記といっても凡例部になど種々挙げられる訳であるが，ここでは以下のような対応状況にある一群のものに関して異同を調査した。

『和英語林集成』（Ⅱ版）		『和独対訳辞林』
coll.（colloquial.）	————	Umgspr.（Umgangssprache.）
vulg.（vulgar.）	————	vulg.（vulgar.）
com.（common.）	————	gem.（gemein.）

これらとYed（o）., Tōkyō. 他の地点表示を交えて構成される両書の注記を整理してまとめると次頁の表の状況となる。尚，各群の語例に就いては付表として稿末に掲げる。

表中(イ)(リ)(ヨ)(ナ)(ラ)の各群は『和独対訳辞林』が『和英語林集成』（Ⅱ版）の注記を踏襲したものである。これらに於いてはむしろ『和英語林集成』のⅠ・Ⅱ・Ⅲ版間での異同変遷を絡めて検討することで各語形の当代に於ける扱いを探ることになる。

表中例えば(イ)群の例である「ニシ」は「ニシュ」の音変化形であるが，その扱いを細かく追うと次の状況になっている。

『和英』II版 ＼ 『和独』		方言関連			単純注記			複合注記		φ	×	計
		Y. c.	Y. v. c.	Nagasaki	c.	v.	a low word	c. c.	v. c.			
方言関連	T. U.	(イ) 15			(ロ) 1			(ハ) 2	(ニ) 1			19
	T. v.	(ホ) 1	(ヘ) 1									2
	K. U.										(ト) 1	1
	Tsiūgoku			(チ) 1								1
単純注記	U.				(リ) 110			(ヌ) 9	(ル) 3	(ヲ) 8	(ワ) 5	135
	v.				(カ) 5	(ヨ) 4	(タ) 1	(レ) 8	(ソ) 5	(ツ) 7	(ネ) 7	37
複合注記	g. U.							(ナ) 3				3
	v. U.								(ラ) 8			8
計		16	1	1	116	4	1	22	17	15	13	206

＊ 数字は注記用例数。

＊ 『和英』II版（=『和英語林集成』II版）の注記例：
Y. c. =Yed(o). coll., Y. v. c.=Yed. vulg. coll.
c. c. =com. coll., v. c.=vulg. coll.
φ=項目存、注記無。×=項目無。

＊ 『和独』（=『和独対訳辞林』）の注記例：
T. U.=Tōkiō. Umgspr., T. v.=Tōkiō. vulg.
K. U.=Kiūsiū. Umgspr.,
g. U.=gem. Umgspr., v. U.=vulg. Umgspr.

『和英語林集成』：

NISHU, ニシュ, 二朱, n. Half an ichibu.（I版）

NISHU, 二朱, n. Half an ichibu, pronounced in Yed. coll. Ni-shi.（II版）

NISHU, ニシュ, 二朱, n. Half an ichibu, name of a silver coin.（III版）

『和独対訳辞林』：

NI-SHU, ニシュ, 二朱, s. ein halber Itsibu od. zwei Shu, in Tōkio Umgspr. Ni-shi ausgesprochen.

「シュ→シ」の音変化自体は，ヘボンが INTRODUCTION. 中でも東京方言の特徴として「shuku → shiku」の例を挙げていることからも，II版で「Yed. coll.」の注記を与えるのは至極当然で，『和独対訳辞林』がそのまま「Tōkiō Umgspr.」とした措置はなおさら尤もである。ただ，III版で「ニシ」に関する条項が全く姿を消してしまう点は，一見『和英語

林集成』Ⅱ版間での大幅な増補的発展を思うとき，削除の理由が些か気にかかる。しかしⅢ版の記述からも明かなように「ニシュ」の指したものは二朱銀貨幣である。それが前代江戸期の通用貨幣であること（注２）からすれば，言語現象上の問題とするより先に貨幣制度上の背景をこのヘボン辞書内の変化に考え合わせる必要がある。結局，平生日用の口頭語形「ニシ」の音変化現象の消滅というよりも，物自体の変転が対訳辞書上に反映した形ということになるのである。又或は，(リ)群の木瓜の関東方言形（注３）と見られる「シドメ」はヘボン辞書各版を通じて「coll.」注記となっており，確かに東国のヘボンの周囲で普通に人々の口に上る語形であったらしいが，『和独対訳辞林』編者も特に地点注記も付さずに「Umgspr.」とすることから，或は特に地域に偏したものとは意識されなかった可能性も考えられないことはない所である。

こうした一語一語の細かな事情を洗い出す手がかりが幾らでも辞書注記中には拾える訳であるが，それは又別の機会に譲り，ここではそれよりも『和英語林集成』の注記に対して『和独対訳辞林』編者が安易に踏襲しなかった部分に特に焦点を当てて検討を加えることとする。

三　非踏襲部分の検討

表から非踏襲の部分にはヘボンと『和独対訳辞林』編者―特に斉田・那波・国司の三邦人―間に於ける方言意識――とりわけ「東京語」意識の相違，また，『和英語林集成』の複合注記の単純化の傾向が窺える。各々に就いて詳しく検討してみたい。

三ノ一　方言要素への対処

三ノ一ノ一　「東京語」観の相違

対訳辞書中に方言注記を導入するということになれば，先ずもって『和英語林集成』の強力な母体となった『日葡辞書』にまで通ることとなる。即ち，端的には例の「下（X.)」注記が思い起こされる。イエズス会宣教師が日本語を観察記述する中で，京都中央の「上」に対し彼らの布教活動の地盤たる九州地方の「下」といった彼らなりの区画を設けて行った訳であるが，一つ確認しておくべきはこの「下」注記がまさに彼らなりのものであり，中に正用規範への執心から必ずしも九州方言へと直接に連絡のなさそうな所までを含み持ってしまっているという事実（注４）であろう。

この場合は方言ならざるものを方言仕立てに取り上げた形であるが，『和英語林集成』の場合はその裏返しに，編者ヘボンが「(東京) 方言」と特別に意識しないものが端からみるとまさに「方言」に相違ないということがあったのである。つまり，東の新都でヘボンがノーマルに捉えた言語が，西の旧都の『和独対訳辞林』編者に於いて最後まで，「方言」注記を抜きにして肯じ得ない要素を孕んだことは，当代東京語の権威未だしを窺わせて興味深い。

『日葡辞書』当時は，京都語が中央語規範語として揺るぎない地位にある時代である為に，それをことさら地点注記に及ぶ必要は編者にとってなかったし，無論その状況に異を

唱える邦人もいなかったが，『和英語林集成』刊行の頃，まさにその中央・規範の意識というものは極めて劇的に交替を演じた。つまり，ヘボン自身がⅡ版のINTRODUCTION.で「この国の古い首都であり，宮廷があり，教養層の居住地である京都の言葉が標準的なものであり，最高の権威あるものと考えられている」（注5）と記しながら，Ⅲ版に於いてそれを「この国の古い首都であり，王政復古までは宮廷があり，教養層の居住地であった京都の言葉が標準的なものであり，最高の権威であるものと考えられていたが，王政復古および東京への首都の移動以来，東京の方言が優位を占めている」（注6）と変更した通り，政治的大変動の後確実に言語意識の上でも旧都京都から新都東京への権威移譲は大勢に於いて進行したのである。

しかしながら一方邦人側の意識，とりわけ京都圏西日本語圏に言語基盤を持つ者たちのそれには，必ずしも東国で外国人ヘボンが冷静に見据える構えとはなかなか相容れぬものがあったのである。

結局，この微妙な東西新旧の「中央」交替期に於ける言語観の相違齟齬が，ヘボンに取り立ててのぼらぬ「東京語」意識を『和独対訳辞林』編者に敏感に嗅ぎとらせた結果，(ロ)(ハ)(ニ)各群に於ける注記の「東京語」化が辞書記述の上で実現することとなったのである。尚それらに就き，次のように『和英語林集成』各版を交えて詳しく動きを捕捉しても，ヘボンの側にはいずれもわざわざ「東京」のものと断わる所は全く見られない（注7）。

(ロ) coll. /coll. /Tōkiō. Umgspr. /ϕ : アブク

(ハ) ϕ/com. coll. /Tōkiō. Umgspr. /com. coll. : アハ

×/com. coll. /Tōkiō. Umgspr. /com. coll. : ナラナイ

(ニ) com. coll. /vulg. coll. /Tōkiō. Umgspr. /coll. : ワチキ

これらが言語の実態として詳細に東西で如何なる状況であるのかは更に調査を加えるべきであるが，少なくともこれが東のヘボンと西の『和独対訳辞林』邦人編者とで「東京語」と捉えるべきものが充分一致を見る程に成熟はしていない動揺期の端的な現象であることは注目すべき事実といってよいのである。

一方で(ヰ)(ホ)(ヘ)群のようにヘボン自ら進んで「東京口頭語」と注した語に就いては，『和独対訳辞林』側に於いて，「ドケル」「ロ」が「東京卑俗語」として若干の訂正を施される他は変更なく受け継がれ『和英語林集成』の言語観と一致をみる。東京語圏のヘボンが認める程に「東京」的であれば，それは西から見ても申し分なくそうであったに相違ない。「東京」注記取り消しの事例は一件もないのである。

尚，細かくは，『和英語林集成』Ⅰ・Ⅱ版に於いて「東京語」注記が「Tōkyō.」ではなく「Yed（o）.」であり，『和独対訳辞林』が全く「Tōkiō.」であるという根本からも，「東京語」観の相違は論ずべき点がある。又，今回は『和独対訳辞林』の注記は拾ったが『和英語林集成』側は全てに及んでいない。それらの検討については改めて行いたい。

三ノ一ノ二　西日本語圏への対処

『和独対訳辞林』の三邦人編者が残した方言要素への関心の示し方は，非東京的或は幾らかの反東京的な言語背景を想定することで納得し得る。特に旧都京都の言語には前稿（注8）に於いて紹介した通り，格別の配慮を払う訳であるが，それ以外にも興味深い事象が

存する。

(ト)の例は次の状況にあるものである。

(ト)　×/×/Kiūshū. Umgspr. /×：ヨカ

この「ヨカ」は近世期より九州方言の代表語形として定着し，『物類称呼』に「○よいと云事を筑紫にて　よかと云…」或は『久留米浜荻』にも久留米方言に取り立てられるなどしているもので，無論現代方言に於いても九州各地に根強く遺存する語形である。

こうした九州方言を注記明示にしてまで一項に立てるというのは，決して方言書などでない対訳辞書の扱いとして誠に異例のものであるとしか言いようがない。この採録状況は三人の邦人編者中にとりわけこの地域語に関わり浅からぬ者の存在を強く示唆するものと受け止められる。その記述ぶりにしてからが，次の如く並々でない。

YOKA，ヨカ，美，(Kiūshū Umgspr) a. gut, schön, hübsch, fein, —onna, eine schön Frau. —Kimono, gute Kleider. Syn. UTSUKUSHII.

「ヨカオンナ」「ヨカキモノ」と日文用例を掲げ，同義語表示も伴った堂々の記述はこれが決して生半可な方言愛好でないことを充分に示している。

また，地点表示に関してはこの「九州」に加え(チ)の例，即ち「ジャッタ」項の記述変更にも『和独対訳辞林』編者中の背景に就いて注目出来る所がある。先ず『和英語林集成』側では，Ⅱ版に次の項記述が行われる。(Ⅲ版同記述，Ⅰ版不立項。)

JATTA，ジャッタ，neg. pret. coll. suff. of. Nagasaki dialect. =nanda ; as Yomimasenjatta=Yomimasenanda, have not read.

ヘボンが「JATTA=nanda」と説明するのは，確かに次の方言的事実に連なり，妥当と言えよう。

方言　動詞の未然形に付いて，打消の過去を示す。「何も知らじゃった」福岡県三井郡・長崎県北松浦郡041・壱岐934　(『日本国語大辞典』)

しかし，自ら挙げた「Yomimasenjatta=Yomimasenanda」は，「njatta」=「nanda」の対応を示して徹底しない。折角西国方言に目を向けながらこなれぬ結果に終したことは，結局『和英語林集成』編者の西的言語への不慣れを露呈する。

こうしてヘボンが当該の特殊な用法を充分な形で取り上げきれなかったのに対し，『和独対訳辞林』編者は同じ語形に就いて立項の精神だけは尊重しつつも内容面では次の通りに，独自の方針で記述を改めてしまうのである。

DJATTA，ジャッタ，p. p. (Umgspr.) Anhängsel in del Mundart von Tsiūgoku, =datta ; z. B. sō-djatta. =sō-datta, es ist so gewesen. Yēn-djatta, =iin-datta, es ist gut gewesen.

西国志向の『和独対訳辞林』編者陣の性格からすれば，ヘボンの「ジャッタ」立項はもってこいの所であった筈。しかしながら「長崎方言」の情報が『和英語林集成』状況を心ゆく迄整える程には入って来ない事情がありでもしたのか，代わりにとばかり「中国方言」として「nanda」ではなく「datta」にひきあてる記述を行ったのである。しかもその際ヘボンと対照的に，「Yēn-djatta=iin-datta」と着実な例文挙示で不安がない。

つまりここには，安易な妥協追従を排した邦人編者の確固たる記述態度とともに，「長崎」は避け「中国」を採った彼らに於いて，同じ西日本方言中でも得手な地点とそうでな

い地点との存したことが注目すべき事実としてまた鮮やかに浮かび上がるのである。

三ノ二　注記に反映した「俗」意識

辞書の注記には注記者の言語観が積極的に表現されている訳であるから，ここではそこに現れる差異を通してヘボンと邦人編者との言語観の差異を探ってみたい。

方言要素を除いて捉えた際，ヘボンの注記は「com.」「coll.」「vulg.」の三要素の組合せによって構成されている。一方『和独対訳辞林』側に於いては，(ヲ) (ワ) (ッ) (ネ)といった独自の新付注記群の状況に明かな通り，大勢に「Umgspr.」「vulg.」の二極化の意識が働いている。そして，これはまた「com. coll.」「vulg. coll.」という複合注記の単純化と表裏なす所でもある。それぞれの複合注記に就いて見ると，『和独対訳辞林』が『和英語林集成』(Ⅱ版) からそのまま「gem. Umgspr.」「vulg. Umgspr.」と引き継いでいる割合は (方言注記関連分も含めて)，前者が 22 例中 3 例とことのほか低く，後者に於いても 17 例中 8 例と半分に満たない。このことは，単独注記の方が「coll. → Umgspr.」で 118 例中 113 例と高率で継承され，「vulg. → vulg.」に於いては 4 例すべてがそのまま採られることと非常に対照的である。

先ず，「com.」注記の削除——即ち「gem.」注記としての非踏襲がこれだけ甚だしかったのは，どうした所に原因があるのであろうか。そのあたりを探るには，今回取り上げた注記の一群に就いて状況を検分する必要がある。そしてその際，注記としての使用状況と，注記以外の解説記述部分に現れる当該要素の対応ぶりとを分けて分析すると，両辞書の事情の違いがより際だって捉えられそうである。

先ずヘボン側の事情から窺う。今試みに，注記以外の箇所——英和の部から「common」他関連の項目をひくと，次のような対訳状況となっていることがわかる。(ローマ字はカナに改めた。Ⅲ版はⅡ版とほぼ同様にて省略。)

	『和英語林集成』Ⅰ版	『和英語林集成』Ⅱ版
COMMON	ツネ；ヘイゼイ；ヘイジツ；フダン；イツモ — people. ヘイミン. — person. ゾクニン；ヘイニン；ボンニン. — soldier, ヘイソツ. — colloquial, ゾクゴ・ヘイワ. — clothes, ヘイフク.	ツーレイノ；ツネノ；ヘイゼイノ；フダンノ；ヘイジツノ；ナミ；アリフレル；イツモ； — people. ヘイミン. — person. ヘイニン. — colloquial, ゾクゴ；ヘイワ In —, モヤイニ
COMMONLY	ゼンタイ；グワンライ；ツネヅネ	ツネニ；フダンニ；ヘイゼイニ
COMMONALITY	(項目なし)	ヘイミン；シモジモ；シタジタ；タミ
COLLOQUIAL	ゾクゴ；ヘイワ	—language. ゾクゴ; ヘイワ
VULGAR	イヤシイ；ゾクナ；ヒレツ；ブコツナ；ゲセンナ；ブイキナ；ゲビル；サガナイ. — person. ゾクブツ. — tongue. ゾクゴ. — style of writing. ゾクブン. — appearance. ゾクラシイ. — class. シモジモ.	イヤシイ；ゾクナ；ヒレツナ；ブコツナ；ゲセンナ；ブイキナ；ゲビル. — person. ゾクブツ. — tongue. ゾクゴ. — style of writing. ゾクブン — appearance. ゾクラシイ. — class. シモジモ.
VULGARLY	イヤシク；ゾクニ；ゾクラシク.	イヤシク；ゾクニ；ゾクラシク.

「common colloquial」の第一訳語に「俗語」が当てられることからこれが「俗」の概念に包括されていることが察せられるが，これは次の和英の部状況からして，第一には「平話」と密接な対応状況なのである。

HEI-WA，ヘイワ，平話，n. Common Colloquial, the language of the common people. Syn. zokudan.（Ⅱ・Ⅲ版 zokugo. を追加）

また，英和の部「common」の関連に広く「平～」の要素が見られることからしても，三要素の一つ「common」は「平」として捉えることが出来る。

次に「vulgar」関連に就いては「卑」の要素と共に「俗」の要素も含まれているが，第一義が「卑」であることは上の英和部の状況や，次の「卑しい（言葉）」の条項から明かである。

（IYASHII, -KI）……—kotoba, vulgar language.（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ版）

但し，次のように「俚俗（の言葉）」の状況などからしてもやはり「vulgar」が一部「俗」に通じる要素を持つことが窺えるのである。

（RI-ZOKU）……—no kotoba, vulgar language.（Ⅱ．Ⅲ版。Ⅰ版は不立項。）

結局，「common」が「平」，「vulgar」が「卑」を強く占有しつつも全体は「俗」の基調に含まれることが浮かび上がってくるのであり，事実それは次の「俗語」に関する記述によく現れている。

ZOKU-GEN，ゾクゲンジ，俗言，or ZOKU-GO，ゾクゴ，The common, or vulgar dialect, such as is spoken by the common people; not the learned, elegant or refined language of scholars.

それではこのように広がる「俗」というものは如何なる形式として反映しているのだろうか。

先に見たように「common colloquial」には「平～」・「俗～」の二者が当てられる。ここで，上述の如く「common」が「平」を特に受け持つものであれば，「俗」に対応するのは相対的に「colloquial」の要素であることが予期される。しかしそれは割合に曖昧な領域意識であって，「俗」があちらこちらに漫然と顔を出すのと同程度にこれら一群の要素の基盤に存するものである。

このような手広い「俗」の振舞いは，当代の国語辞書側，例えば次の『語彙』の場合に於いても看取し得る所。

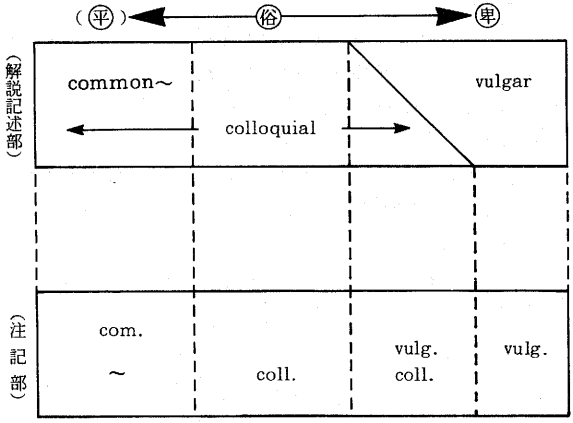
一　方今の俗言及び諸国方言の如きは本語の下に　如此記す又雅言なるべくおぼゆるも書籍の徴を得ざるものは姑く俗字を標す…（巻一・「語彙凡例」四丁表）

但しこの『語彙』の場合，「雅言なるべくおぼゆる」ものでも，用例を見出せぬ以上は全て「俗」と見なす訳であり，その点「俗」の領域は異様に拡大された観がある（注9）。しかし，いずれにしても，邦人側に於いて言語分類上の「俗」が「雅」の対立概念として「平」なり「卑」なり種々の要素を包含し，逆に言えば極めて曖昧に広く用いられる状況にあったことは確かであろう。

そして，ヘボンに於ける「俗」（「colloquial」）に就いてもまた，まさにかような国語意

識と通う所を見出すことにさして困難は覚えぬ訳である。

結局，以上見てきた所を考え併せるならば，『和英語林集成』の解説記述部分と注記の使用ぶりとは，次のような対応状況として捉えられる。



つまり，ヘボンに於いて注記部分はそれ以外の英文記述部と概ね対応し一貫性を保っていることが窺われるのである。「coll.」と「com.coll.」が「平，俗」で通じやすいのは先に見た所であるし，また，「colloquial」はこれら一群を曖昧に覆う要素でもあるから，「vulg.」と「vulg.coll.」の境界もまた曖昧となりやすい。実際後者は今回調査の語例を見ても，「卑」の要素から一括りにし得る。かくして，『和英語林集成』側の枠組みは「平，俗」：「卑」＝「(com.) coll.」：「vulg. (coll.)」の状況であったと言うことが出来る。

一方，『和独対訳辞林』に於いては「独和の部」省略の事情から簡単には行かないが，先ず注記以外の状況から窺うと，「平話」「俗語」「俚俗（の言葉)」「卑しい（言葉)」の項記述は次の通りである。

HEI–WA，ヘイワ，平話，s. die gemein Umgangssprache, die Sprache des gemein Volks. Syn. DZOKUDAN, DZOKUGO.

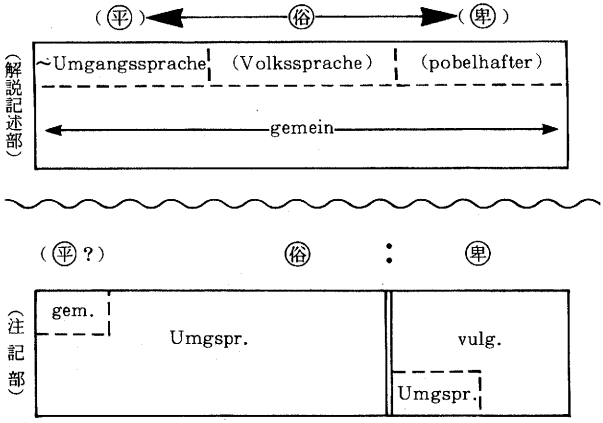
DZOKU–GO，ゾクゴ，俗語，S. der gemein Ausdruck, Volkssprache, f. ; der Ausdruck, — wie das gemein Volk spricht.

(RI–DZOKU) …… — no kotoba, die gemein Sprache.

(IYASHII, –ki, –ku) …… — kotoba, die pöbalhafter oder gemein Sprache.

これらを見渡すと，『和独対訳辞林』記述解説部内に於いては，「gemein」が「平」「俗」「卑」の全領域に行き渡っていることが分かる。先のヘボンの場合で言えば，ちょうど「colloquial」が広義の「俗」として「平」「卑」の基底に広がっていたことに対応し，枠組みだけは『和英語林集成』の状況と似ている。そしてそれはまた，先の『語彙』に見た如く当代に見られる「俗」の手広い勢力と呼応する形でもある。

しかし，この『和独対訳辞林』の解説記述部分はそのまま注記の状況に対応しているという訳ではないのである。つまり，ヘボンの場合と異なり，解説記述部分と注記部分とで，『和独対訳辞林』は次のように食い違いを見せる訳である。



結局，注記部分が邦人による所であることは方言要素等これ迄の他の徴証から明かであるから，この解説記述と注記との相違は，解説記述等独文に関わる部分をレーマンが主に受け持ち日本語に関する注記は弟子の邦人編者——斉田・那波・国司の三人——に任せたという事情によるものと推察される。

仮に解説記述者の言語類別意識を注記に持ち込んだならば，「gem.」が漫然とふりまかれるのみでそれは注記者にとって意義が薄れる。注記作業に当たって担当者はそうした曖昧に領分の広がる「gem.」を無視して国語の類別化を図ることとした。即ちその『和独対訳辞林』注記部に於ける語の類別化は，先述のように，大きく「Umgspr.」・「vulg.」という二大注記を以て行われたのである。痕跡的に見える「gem. Umgspr.」，「vulg. Umgspr.」はヘボン注記の僅かな残影に過ぎない。つまり，これからすると，邦人編者の中ではヘボン状況からずっと「平」の要素の欠けた「俗」：「卑」＝「Umgspr.」：「vulg.」の二大別意識のあったものと推定されるのである。

このように当該注記の一群に就いて探り，『和英語林集成』「com.」と『和独対訳辞林』「gem.」との背景にある差異を見出しても尚，英和の部で全く等価に見える「coll.」と「common colloquial.」とがヘボン辞書全般に亙ってどう区分けされているのかといった部分が徹底追求出来なかった課題として残る。「com.」注記削除のうち最も量的に多いのが(ヌ)群の「com. coll. → Umgspr.」型であることは，当然そこに関わるものであり，今後『和英語林集成』側でさらに状況を検証する必要があろう。

いずれにしても，ヘボンの創案した「com. coll.」注記は，たとえ自身に於ける目論見として弁別の度合がかなりに高かったのだとしても，「colloquial」との区分の曖昧さ，又『和独対訳辞林』側での「gem.」の曖昧さ或は注記者の「平（＝com. 或は＝gem.）」意識の欠如の為，充分に活用されることが無かったのである。

尤も，ここでなにより大きな問題は，単に異言語間の翻訳ということ以上に，「平話」（或は「俗語」）という言語の領域がヘボンが注するほどに当代国語の現実に於いてどれだけ確立していたかということに他ならない。「平話」＝「common colloquial」＝「gemein Umgangssprache」という対応形式自体はもともと備わっていた訳であるから，今後これ

ら対訳辞書とそれ以外の当代に於ける「平話」という術語の展開ぶりとを併せ検証する必要があろう。

同じ複合注記の単純化でも，「vulg. coll.」の場合は上述のように『和独対訳辞林』の中で相対的に「卑」の領分をかなりしっかりと確保する形であるから，もともとヘボンが「vulg.」と認定した際にそれが取り消されることは少なく，「vulg. coll.→ Umgspr.」の変化は(ル)群の三例に留まる。「ガナル」はいま一つすっきりしない（但しⅢ版では coll.）が，「イケ～」「カラ～」の接頭語は単独では品位に関わらないと見たものだろう。

それに対して(ソ)群のものはいかにも濁音促音の入り混じった罵倒語の類が多く，「vulg.」の一本立てで構わないとしたもので，それからすれば(ラ)群に於いてはむしろ「Umgspr.」を付け足しとさえ捉え得る所である。

こうした「卑」の要素の嗅ぎ出しは，邦人に於いて非常に鋭敏なものがあり，従ってヘボンの取り立てて注さぬ所でも(カ)群(ツ)群と積極的な訳である。さらには『和英語林集成』に項目のない新設項に於いても，(ネ)群のように進んで注記に及ぶことになる。そうして付された「vulg.」注記のものを観察すれば，やはり音印象上の品位或は道徳上の品位などヘボンの観察した以上に母国語話者の編集陣はこの注記について自信を持った振舞いが可能であったように見受ける。それもやはりこれ迄見た通り，邦人の言語観の中に「卑」＝「vulg.」の意識連鎖が確として存在していたからに他ならないと考えるのである。

四　おわりに

注記部分は辞書編者の窺う上で，とりわけ貴重な情報をもたらす所である。『和英語林集成』の注記もまた重要な言語観察の資料であるが，中央―地方或は雅―俗といった国語に於ける重要要素の一大変動期にあたった為に，『和独対訳辞林』邦人編者の言語観とは必ずしも相居れない箇所を生じてしまった。

その要因として，先ず編者が母国語話者かどうかといった点，次に編者の言語背景が東西で異なった点，それから編者年代の相違といった点が挙げられる。これらに就いては尚細かく分析が進められるべきであろう。

また，『和独対訳辞林』編者に於いて西的方言に基盤を持つ事実は動かぬとしても，その状況の中に「京都」重視の方針の他，「九州」に着目しながら一方で「長崎」は避け「中国」への差替えを図るなど，細かな姿勢の相違にも気を配る必要が出てきた。

いずれにせよ，今後当代国語の研究に於いて対訳辞書から『和英語林集成』を代表に利用を図る際，この『和独対訳辞林』の検証を併せて行うことの意義は今回の検討によってもますます高められた。一々の項目にも目を向けて，更に全般に亙る検討を続けて行きたい。

付　表

（イ）　アッケラカン・クダサイマス・ショッチュウ・スレッカラシ・ナサイ・ニシ・ネ(1)，ネ(3)，ヤジンマ・ヨイヨイ・ヨカンベイ・ヨッパラウ・ヨッピテエ

（ロ）　アブク

（ハ）　アバ・ナラナイ

（ニ）　ワチキ

(ホ) ドケル
(ト) ロ
(ト) ヨカ
(チ) ジャッタ
(リ) アイニク・アクドイ・アッタラ・アバイアウ・アルマイ・ナカロウ・アロウ・アンマリ・イイパナシ・イカサマ・ウトウ・ウルウ・エ・エンマ・カイイ・カエブシ・〜ガケ・カタカッタ・コ・コリャ・コロガス・サヨーデゴザリマス・シカナイ・シドメ。〜シナ・シナイ・シノウ・ジバン・ジャ・シャアツク・ショザイ・スイ・スベタ・スボケル・スリャ・ゼッピ・セニャ・セリアゲル・ソ・ソウコウ・ソツ・ソックビ・ソックリ・ゾッコン・タイシタ・タイマイ・タジタジ・タジレル・タチマイ・タッタ・タッピツ・タマカ・タモレ・ダレル・ダロウ・タント・タンノウ・タンビ・チチ・チャッポ・ツクバウ・ツッカイボウ・ツッカカル・ツッコミ・デナ・デナサイ・デナサレ・デヨウ・テレン・テンヤ・トウトウ・トト・ナケレバ・ナロウ・ナンダ・ナンナンタル・ニュウ・ニヤ・ネ(2)，ネリカム・ノタリデル・ノメル・ハジマラヌ・ヒッカエス・ヒッカブル・ヒックム・ヒッサバク・ヒッシバル・ピッタリト・ヒッパグ・ヒッパタク・ヒッパズス・ヒッパナス・ヒッパル・ブイキナ・ブウ・フショウ・フダン・ブブ・ボウ・ボリボリト・マイゴ・ミタイ・ミヨウ・ミロ・モットイ・ヨッタ・ヨッタリ・ロレツ・ワタシ・ワヤワヤト・
(ヌ) イカセル・カイ・シヤル・スミッコ・ダレ・ナクンバ・ナゾ・ナリッコ・ミミッチイ
(ル) イケ〜・カラ〜・ガナル・
(ヲ) アキンド・アヤス・イモジ・ジンロク・チョウズダライ・ベッピン
(ワ) アケッパナシ・アッチ・アナカンムリ・アマダレ
(カ) イワナイ・イラナイ・ドサクサ
(ヨ) オレ・クタバル・コイツ・ゼイロク
(タ) ヌカス
(レ) イク・イケル・オトッサン・ケンツク・ケンノミ・タボ・ドジ・ヒガナイ
(ソ) アイシラウ・ウチ・オリャ・ダラッピョウシナ・ベラボウ
(ツ) アオタ・オッカア・カケオチ・カブセル・ダンマ・チョウサイボウ・ムネクソ
(ネ) ショウワル・ズクニュウ・タイチョウ・タダコ・ネンネイ
(ナ) アタ・シチリケッカイ・ヤケボックイ
(ラ) コッピスイ・シャガレル・スケベイ・デッカイ・デロ・ブチノメス・ヨコゾッポウ

＊「ネ(1)〜(3)」は各々「ネ」項目中の部分記述

注

(1)「和独対訳辞林」について（「語文研究」60)，「和独対訳辞林」に於ける見出し・同義語表示部の検討（「語文研究」65)。
(2) 明和九（1772)，文政七（1824)，安政六（1859）の三種がある。(『日本国語大辞典』)
(3) しどめ…方言　埼玉県 248　千葉県 250　群馬県佐波郡 273　東京都八王子 280　神奈川県 289 (『日本国語大辞典』)
(4) 亀井孝氏「捷解新語小考」(『一橋論叢』39巻1号)，迫野虔徳先生「地方語文献による方言語史」(『国文学解釈と鑑賞』昭和五九年五月臨時増刊号「新しい方言研究」)，他。
(5) 松村明氏の訳による。(講談社学術文庫『和英語林集成』解説 970 頁。)
(6) 同上。
(7)『和英語林集成』Ⅰ版／Ⅱ版／『和独対訳辞林』／Ⅲ版。以下同様。
(8)（1）と同じ。
(9) 山田忠雄氏『近代国語辞書の歩み（上)』508 〜 509 頁。